



独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

令和3年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業報告書

難民のエンパワメントと社会参画を通じた 回復から自立までの支援事業



難民の友に、難民と共に！ Let's be friends, Together with Refugees.



NPO法人

アルペなんみんセンター

Nonprofit Organization

Arrupe Refugee Center

迫害から逃れて来日した難民に「シェルター」「学ぶ機会」「交流の場」を提供しています！
We provide "Shelter", "Learning Opportunity" and "Place of Interaction" for Refugees in Japan!

はじめに

NPO 法人アルペなんみんセンターは、2020 年 4 月に全国で最大規模の難民シェルターを開設しました。神奈川県鎌倉市十二所のシェルターを拠点として、地域の市民グループ、ボランティア、医療従事者などの専門家、学生、市町村の組織、福祉施設、企業などと連携・協働して事業を展開しています。

2021 年度は、独立行政法人福祉医療機構の令和 3 年度社会福祉振興助成事業による助成を受け、「難民のエンパワメントと社会参画を通じた回復から自立までの支援事業」を実施いたしました。主に難民認定申請者を保護し、身体的・精神的な回復と自立を促すことを目的に、3つの活動の柱、(1) 回復のための場づくり事業、(2) 難民自らによる発信事業、(3) 難民の社会参画の政策化と支援モジュールの提供事業を主軸として事業を展開して参りました。

本事業を通して、安心して暮らせるための地域共生社会の実現を目指しました。

- 2 はじめに
- 3 事業概要 難民のエンパワメントと社会参画を通じた回復から自立までの支援事業
- 4 (1) 回復のための場づくり事業
- 6 (2) 難民自らによる発信事業
- 8 (3) 難民の社会参画の政策化と支援モジュールの提供事業
- 9 鎌倉市の地域通貨「クルッポ」を活用した難民の社会参画
- 10 鎌倉市 クルッポアワード 2021 (SDGs 部門) を受賞
- 10 「鎌倉なんみん共生フォーラム」設立に向けた取り組み
- 11 利用者 (なんみん) の声
- 12 ボランティアの声 生活支援ボランティア / 日本語学習ボランティア
- 14 メディア掲載 (新聞、雑誌、テレビ、ラジオ等)
- 15 一年間の活動を終えて

事業概要

難民のエンパワメントと社会参画を通じた 回復から自立までの支援事業

(1) 回復のための場づくり事業

難民シェルターでは、主に入管施設^{注1}から仮放免^{注2}を受けている難民認定申請者^{注3}を対象に、必要な衣食住を提供します。また、日本語教育や音楽セラピー、カウンセリングなどの活動を通して難民が身体的・精神的に回復し、将来の地域での定住など、難民自らが次の歩みを決定し進めるよう支援します。

(2) 難民自らによる発信事業

地域のイベントや学習会、SNS やニュースレターなどを通して、難民自身が自らの状況や日本で難民が置かれている現状について社会に発信します。難民と地域住民の交流を通して、地域社会をはじめ日本社会の人々が難民について関心をもち、理解を深めることで、難民の地域参画や自立が促進されることを目的とします。

(3) 難民の社会参画の政策化と支援モジュールの提供事業

この事業を通して実施する難民の回復プロセスや地域における社会参画を、地域行政との連携・政策化に結びつけ、将来的には全国の難民支援団体や地方自治体で活用できる支援モジュールを確立させます。地域行政による福祉プログラムや地域通貨の活動への参加、地域行政の政策への提言や連携を通して、難民が直面する課題の解決の一助とします。

注1 入管施設：外国人を管理するための機関、出入国在留管理庁は全国に通称「入管施設」といわれる収容施設を有しています。非正規滞在などを理由に多くの外国人が収容されています。2021年3月には、名古屋入管に収容されていたスリランカ人女性ウィシュマ・サンダマリさんの死亡事件が発生するなど、入管施設内での非人道的な扱いが問題になっています。

注2 仮放免：日本政府は非正規滞在の外国人を司法の手続きを経ず無期限に収容したのち、強制的に送還する措置をとっています。これらの措置を一時的に解く手続きが仮放免です。難民申請中、病気等の理由で認められることがあります。しかし、仮放免中は就労ができない、健康保険などの行政サービスが受けられない、県をまたぐ移動には毎回入管の許可が必要とされるなど、様々な制限があります。

注3 難民認定申請者：日本で難民認定を受けるには、法務省出入国在留管理庁に難民認定申請をする必要があります。手続きには2～3年かかり、そのうち約99%は認定されません。この報告書では難民認定申請者を含めて「難民」と表現します。

(1) 回復のための場づくり事業

難民の安心できる場所の確保

神奈川県鎌倉市にある日本最大級の難民シェルターにて、2021年度は20名の難民を受け入れました。

(1) 難民シェルター運営

設備 施設内には30部屋の個室があり、各部屋にはベッド、机、椅子、照明、洗面台、冷暖房器具、戸棚などの設備が完備されています。共同トイレ、シャワー、洗濯機、談話室も1階女性棟、2階男性棟にそれぞれ設置しました。通信手段を確保するため、入居者スマートフォンを提供し、施設内で常時Wi-Fiが接続できるようにしました。



食事 1日3食の温かい食事を提供しました。調理担当スタッフとボランティア、入居者が調理を担当しました。WAM助成に加え、近隣の農家や青果店、フードバンク、社会福祉協議会などからも食材の支援を得ました。



衣料・日用品 地域の市民グループや個人から中古・新品の衣料や日用品の寄贈を受けました。入居者は、毎月開かれるショッパ（配布会）で必要な衣料や日用品を入手しました。寄贈品の整理や配布は地域のボランティアグループの協力で行われました。



医療 週1回、地元の医師による往診、月1回、2名の医師と1名の鍼灸師による医療相談を実施しました。必要に応じて地域の医療機関での診療にスタッフが同行するなどのサポートも行いました。



(2) 日本語・英語学習

日本における将来的な自立のため、日本語の個人レッスンを実施しました。また、入居者同士のコミュニケーションのために、ボランティアによる英語のグループレッスンを週1回実施しました。



(3) 翻訳・通訳支援

入居者のニーズに応じて、英語、フランス語、アラビア語等の翻訳、通訳を行いました。

身体的・精神的な回復を 目指す諸活動

～難民の声を聴き、ニーズに応える～



(1) 音楽セラピー

入居者の回復と癒しを促すことを目的に、プロの歌手の指導による週1回の音楽セラピーを実施しました。ストレッチや歌を通して入居者同士が交流し、励ましあう場ともなりました。

6月20日の「世界難民の日」にはオリジナル楽曲を入居者全員で歌い、オンラインイベントで配信しました。また、打楽器ワークショップを開催し、12月18日の「国際移住者デー」のオンラインイベントで動画配信しました。

(2) 農作業

施設内の畑で、毎週土曜日農作業を行いました。近隣住民が中心となり、入居者と交流しながら野菜を育てました。作業には子どもたちも参加し、ふれあいの場ともなりました。春と秋にはみんなで収穫の喜びを分かち合いました。



(3) 日本文化、日本の歴史を学ぶ

日本の文化を学び、入居者同士の交流、地域の人びととつながるため、近隣の寺院、文化施設、歴史的な施設等を訪問しました。



(4) カウンセリング・生活支援など

入居者の日々の悩みなどに応えるため、専従スタッフが常時相談に応じています。子育て支援、資格取得支援、ワクチン接種などの新型コロナウイルス感染予防対策、入管への同行なども行いました。

(2) 難民自らによる発信事業

情報発信

(1) ニュースレター「アルペ通信」

本事業での取り組みをはじめとした当団体の活動を広く伝えるため、ニュースレター「アルペ通信」第2号と第3号を各8,000部発行、配布しました。



(2) ホームページ

当団体のホームページにて活動について紹介しました。またイベントの募集と報告を行いました。
<https://arrupe-refugee.jp>



(3) SNS 配信、YouTube チャンネル

Facebook ページにて当団体の活動の最新情報を発信しました。
<https://www.facebook.com/arrupe-refugee> また、YouTube でも動画を配信しました。



(4) パンフレット

団体の活動紹介パンフレットを5万部発行し、公共・民間の施設、店舗などで配布しました。



(5) ポスター

「わたしは なんみんです。かまくらでくらししています。」というメッセージを掲げた啓発ポスターを200部作製しました。鎌倉市内の公立の全小中学校に配布し、校内掲示を依頼しています。



イベント主催・参加

(1) 「世界難民の日」イベント

6月20日の「世界難民の日」にオンラインイベントを主催し、施設の活動紹介やインタビューなどのプログラムを配信しました。その様子はNHKや民放のテレビ、新聞各社で報道されました。(詳細は14ページ) Facebook ライブ等で配信され約1,500回視聴されました。(2022年3月現在)



(2) 「国際移住者デー」 イベント参加

打楽器ワークショップを開催し、録画編集した動画を12月18日「移住者と連帯する全国ネットワーク」主催のオンラインイベント「国際移住者デー 2021 私たちの社会は、私たちがつくる！」の一部として配信しました。

(3) チャリティコンサート等

- bit主催チャリティコンサート (10/16)
- 鎌倉市民合唱祭 (10/30)
- 鎌倉ユネスコ協会「料理を通して国際理解」(12/6)



(4) 近隣の居場所プログラム

月一回開催される近隣の地域食堂「ふらっとカフェ in 二階堂」に毎回参加しました。



難民セミナー（国際理解教育） / オープンデー（施設見学）

オンライン難民セミナーを全国の小中高、大学で実施しました。近隣施設では対面でも実施しました。また施設見学、難民との交流を目的にオープンデーを開催しました。

日程	主催 / 実施団体 / 協働団体	参加人数
4月11日	SDGs活動支援センター、鎌倉ユネスコ協会、アルペなんみんセンター	120人
5月6日	新潟県立看護大学	12人
5月22日	カトリック雪ノ下教会	100人
6月17日	上智福岡中学高等学校	160人
6月23日	東京外国語大学	85人
9月4日	鎌倉市SDGs推進隊学習会	23人
9月11日	船橋学習センター ガリラヤ	95人
9月28日	プラチナ・ギルドの会	50人
10月19日	イエズス会社会司牧センター	120人
10月30日	アースデイ鎌倉	50人
11月4日	県立大船高校訪問	4人
11月16日	新座市第4中学校	160人
12月1日	プラチナ・ギルドの会	14人
12月2日	広島学院中学校・高等学校	1,100人
12月16日	アルペなんみんセンター（オープンデー）	8人
12月18日	移住者と連帯する全国ネットワーク	120人
1月12日	清泉女子大学	70人
1月13日	アルペなんみんセンター（オープンデー）	12人
1月25日	湘南白百合学園同窓会	20人
1月26日	自由学園中等科	13人
1月29日	神奈川ネットワーク運動	40人
2月28日	グローバル時代の日本と人権保障研究会	7人
3月10日	(公財)かながわ国際交流財団・明治学院大学「内なる国際化プロジェクト」	16人
3月17日	アルペなんみんセンター（オープンデー）	5人
3月20日	多文化共生教育ネットワークかながわ ME-net	78人
3月29日	地域の居場所「さっちゃんち」	15人
参加者合計		2,497人



(3) 難民の社会参画の政策化と支援モジュールの提供事業

社会参画・貢献活動

難民が地域の様々な活動に参加し、たくさんの出会いに恵まれました。地域社会で役割があり、受け入れられることは難民の精神的回復にもつながりました。

(1) 市民活動への参画・共同企画

地域の市民活動グループによる「アースデイ鎌倉」や「SDGs セミナー」などの市民イベントにおいて難民に関する講義やアピールを行うことで、地域の人々に難民について知っていただく機会となりました。



アースデイ鎌倉 10月30日 鎌倉芸術館

(2) 地域通貨「クルッポ」を活用した地域とのつながり

支援に頼る生活でいつも「受ける」側の難民が地域通貨「クルッポ」を通じて地域の人に「与える」側になる体験ができました。(詳細は9ページ)

(3) 「なんみんカフェ」の実施

地域の人々が難民と出会い、難民に関心を持つきっかけとなるよう「なんみんカフェ」を地域の企業、飲食店と協働で開催しました。

「食」を紹介することで、難民の母国や難民問題についてより身近に感じてもらいました。



4月27日 ゲストハウス「亀時間」 ミャンマーのMさんがつくるまぜうどん「ナンジートウ」



10月31日 まちの社員食堂 スリランカのRさんがつくるミルクティー



12月12日 まちの社員食堂 スリランカのRさんがつくるスリランカカレー

鎌倉市の地域通貨「クルッポ」を活用した難民の社会参画

(1) 鎌倉市の地域通貨「クルッポ」

鎌倉市の「クルッポ」とは、2021年1月からスタートした「人と人のつながり」を増やす地域通貨です。鎌倉市の企業「面白法人カヤック」によって運営されており、神奈川県のSDGs（持続可能な開発目標）推進事業の一環でもあります。

クルッポはスマートフォンアプリ「まちのコイン」を利用し、コインを提供する場所「スポット」で獲得することができます。例えばテイクアウトの容器を持参すると200クルッポ、窓拭きをすると1,000クルッポなどの体験を通して貯め、集めたクルッポは500クルッポで「鎌倉の歴史を知る」などの体験に利用できます。

まちと人とつながることで毎日の楽しみが増えたり、SDGsに貢献できたりする地域通貨です。



(2) 地元企業とクルッポを活用し、「なんみんカフェ」を開催

2021年4月に鎌倉のゲストハウス「亀時間」、12月にカヤックが運営する「まちの社員食堂」でクルッポを活用した「なんみんカフェ」を開催しました。

「亀時間」ではミャンマー出身のMさんが母国で人気の「ナンジートゥ」という麺料理を振る舞いました。13名のお客様で満席となり、日本ではなかなか食べることができないミャンマーの家庭料理は大好評でした。

食を通してミャンマーの文化に触れ、Mさん

との出会いを通して日本に暮らす難民の状況について知る機会となりました。今まで難民について知らなかった地域の方々も、Mさんやアルペを応援してくだっている方々とつながり、地域の交流が広がりました。

Mさんは「知らないお客様に自分の作る料理をお出しするのは初めて」と、当日まで何度も試作を繰り返しました。当日はお客様の笑顔に触れ、それがMさん自身の喜びと自信になりました。

アルペでは今後も地域の方々との出会いと交流の場をつくり、「難民を友人として迎え入れる地域づくり」を進めていきます。



(3) 地元企業とコラボした消臭袋を開発

2022年2月、「カドルコーヒー」、「メーカーズシャツ鎌倉」、「アルペなんみんセンター」による共同のクルッポ企画がはじまりました。

メーカーズシャツ鎌倉さんの端切れ布を、アルペなんみんセンターの難民が巾着に縫製し、カドルコーヒーさんのコーヒーの出廻らしを詰めた「人と地球にやさしいコーヒー消臭袋」を開発しました。

鎌倉でアップサイクル（捨てられるはずだった廃棄物や不用品を、新しい製品にアップグレードすること）、難民支援、SDGsに貢献する嬉しいつながりの企画がクルッポという地域通貨を通して実現できました。

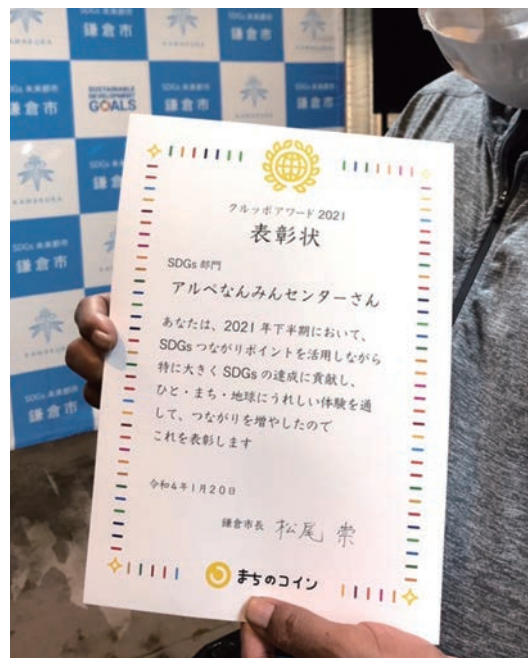


鎌倉市 クルッポアワード 2021 (SDGs 部門) を受賞

2022年1月20日「SDGs 未来都市」を掲げる鎌倉市とクルッポを運営するカヤックが企画した「クルッポアワード 2021」で「SDGs 部門賞」をいただきました。「特に大きく SDGs の達成に貢献し、ひと・まち・地球に嬉しい体験を通して、つながりを増やしたスポット」として表彰されました。



写真中央、松尾 崇 鎌倉市長 (2022年1月20日、鎌倉市役所)



「鎌倉なんみん共生フォーラム」設立に向けた取り組み

地域における難民の受け入れと支援に関する連携をはかるため、市民グループ、社会福祉協議会、社会福祉施設、市議会議員、メディア関係者などが集い、学習会を行いました。

カナダの自治体や市民グループによる難民受け入れの事例について学び、地域での難民受け入れのための意見交換をしました。最後に、鎌倉なんみん共生フォーラムの設立にむけて参加者一同で合意しました。



カナダに学ぶ難民の受け入れ

ー プライベートスポンサーシップを通して

日時 11月11日(木) 14:00～16:00
場所 カトリック雪ノ下教会レベックホール
講師 新島彩子(認定NPO法人難民支援協会 理事)
参加人数 36名

参加団体・参加者所属団体

鎌倉市議会、鎌倉市社会福祉協議会
鎌倉警察署、神奈川ネットワーク運動
鎌倉市浄明寺町内会
特定非営利活動法人 鎌倉ユネスコ協会
社会福祉法人きしろ社会事業会
ふらっとカフェ鎌倉、ぐるうぷ未来
アムネスティ・インターナショナル鎌倉グループ
NHK、面白法人カヤック、カトリック雪ノ下教会

利用者（なんみん）の声

アルペなんみんセンターのシェルターで1年以上生活しているスリランカ出身のRさんとミャンマー出身のMさんとともに本事業について振り返り、それぞれの思いを聞かせていただきました。

アルペでの生活はいかがですか？

M: 様々な国、年齢層の方々との共同生活で楽しく、個室もあるので幸せを感じています。食事にも地域のたくさんのの方々のご支援があります。日本語や英語の学習を通して、日本人の方々とのコミュニケーションが取れて嬉しいです。

R: ここでの生活は楽しいのですが、早く自立したいという気持ちがあります。(入管法で仮放免者の就労は禁止されていますが、在留資格を得て)自分で働いて、自分の生活をしたいのです。

M: 支援をいただけるだけでなく、地域の方々との交流があり、友だちもたくさんできて嬉しいです。一方で、いつシェルターから自立できるのかという不安があって、滞在が長くなるほど心が傷ついています。

お二人には学校の授業や難民セミナーでお話しいただきましたが、どのように感じていますか？

M: 難民自らがイベントやメディアを通して、社会に広くメッセージを伝えていくのは、他の難民支援団体にはない、アルペの特徴だと思います。これからも積極的に伝え続けていきたいです。特に大学生たちに難民の現状や辛さを伝えることで、将来の難民たちが安心、安全に暮らせる社会に変わっていけば良いかと願っています。

R: 自分の辛い体験を話すと、心が苦しくなることもあります。でも真実を話し続けることで、正しい結果につながると信じています。社会の人々が難民

の現状を理解し、世の中の意識が変わってほしいのです。

M: 難民の辛さを多くの方々に知っていただきたいです。難民や移民を「悪い人」だと思わないでほしいのです。



「なんみんカフェ」などのイベントではいかがでしたか？

M: 初めて出会う方に自分のつくった料理を食べていただくので、とても緊張しましたが、一所懸命準備しました。地域の方々が料理を通してミャンマーのことを知っていただけて嬉しかったです。

R: 自分のつくったカレーやミルクティーで地域の皆さんが喜んでくれることは、本当に嬉しいです。これからも続けていきたいです。将来はカレー屋さんができたら良いと思います。

最後に一言お願いします。

R: 自分は難民なのに、長年難民認定を待ち続けています。早く自分の生活を変えたいです。ありがとうございます。

M: アルペで1年半以上暮らし、たくさんのボランティアさん、地域の支援で私たちはここまで生き延びることができました。アルペでの活動を通して、心が元気になり、やる気がでてくるのです。ありがとうございました。



ボランティアの声

生活支援ボランティア

赤瀬川由乃さん

アルペなんみんセンターでの日々の食事は、家族のように皆で食べることを心がけています。

毎日12時半の「ごはんだよー!」というベルの音とともに皆が食堂に集まり、入居者、スタッフ、ボランティアと一緒に食卓を囲み、おいしい食事と楽しい会話を交えながら和やかな時間を過ごしています。

入居者の中にイスラム教徒の方が数人いるので、鶏肉中心のメニューが多いのですが、ボランティアは引き継ぎノートを読みながら、

その時々で食材の組合せを考えて調理をしています。

食材の買い出しを月2回行きます。彼らのモチベーションが少しでも上がることを願いながら食材を購入しています。

入居者が皆に自国の料理を振るまってくれる事もあります。「自分も人のために料理を作りたい!」という意欲はここでの食を通じて得られていることと感じています。

様々な厳しい制約や難しい問題を抱えている彼らにとって、アルペでの食事は彼らの笑顔を引き出し、活力を湧かせ、彼ら自身の命を明日へとつなぐ大切な糧となっています。



日本語学習ボランティア

大年 萌音 さん

2021年の春から、アルペなんみんセンターで日本語ボランティアを担当しています。これまで難民と関わった経験はありませんでしたが、大学院で学んだ日本語教育を実践したいと思い、日本語レッスンを行ってきました。レッスンでは漢字を勉強したり、最近の出来事を話してもらったりしています。

レッスンを始める前、私の担当する方は「自分のことを話さない人だ」と聞いていました。収容施設にいたこともあり、日本人を信用していないようだとのことで、レッスが始まるまでとても不安でした。しかし回を重ねるごとに徐々に関係性を築き、自分のことや家族のことを楽しそうに話してくれるようになりました。

アルペ職員の方に「彼のことを一番よく知っている」と言っていただいたのがとても嬉しく、ボランティアを続ける活力になっています。また、アルペに行くと、担当する方以外にもたくさんの方が話しかけてくださり、日本語レッスンだけでなく多くの思い出ができました。

アルペでの活動を通し、日本語ボランティアの役割は、必ずしも日本語を教えることだけではないと気が付きました。たとえば日本語の勉強が進まなくても、悩みに耳を傾け寄り添うことが彼らの力になっていると感じることが多くありました。そうして話してもらうことで、日本語で会話をする練習にもなっていたと思います。

1年間のボランティア活動で、日本語を教えるということ、難民のことについて多くのことを学びました。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。



メディア掲載（新聞、雑誌、テレビ、ラジオ等）

2021年（令和3年）新聞14、雑誌3、ネットニュース2、テレビ3、ラジオ1

- ・ コロナ禍で増える入管の仮放免 就労不可で困窮も 04/19 日本経済新聞
- ・ まちのコインで難民さんが笑顔に！ 06/18 カヤックニュース
- ・ New refugee shelter provides safety, stability and hope for the future 06/20 NHK World
- ・ 難民過去最多「コロナでさらに困窮」 06/20 TBS ニュース
- ・ 「世界難民の日」オンラインで交流 06/21 NHK ニュース
- ・ アルペなんみんセンター活動紹介 06/21 鎌倉 FM
- ・ 鎌倉にたたずむ難民シェルター 閉じた心、取り戻すため 07/28 朝日新聞
- ・ 難民問題も「まちのコイン」でジブンゴト化 07/28 SHONAN TIME
- ・ 難民申請者と交流の輪 鎌倉のNPO、日本の難民政策に一石 09/18 東京新聞
- ・ 代理人弁護士「歴史的」＝難民支援団体も歓迎―強制送還「違憲」判決 09/22 時事通信
- ・ 地域交流で“社会とのつながりを” 10/20 NHK ニュース
- ・ 母国逃れてきた人、日本にも 10/21 朝日小学生新聞
- ・ 生きていてよかったと思える家を 12/01 こころの友
- ・ 難民の人々を歓迎できる社会に！ 12/01 福音宣教
- ・ 鎌倉市議会の総意として難民政策の見直しを求める意見書を国に提出 12/01 M ネット
- ・ 農作業や“まちのコイン”で市民交流 12/01 鎌倉朝日新聞
- ・ 「中学生」と「難民」（全国中学生人権作文コンテスト神奈川大会最優秀賞） 12/04 神奈川新聞
- ・ 難民申請者に居場所を（共同通信配信） 12/28 西日本新聞他 5紙

2022年（令和4年）新聞4、雑誌2、インターネットテレビ1

- ・ 難民シェルター ひとときでも安息を 01/08 毎日新聞
- ・ Shelter in east Japan provides temporary comfort to refugee applicants 01/17 毎日新聞
- ・ クルッポアワード なんみんセンターなど受賞 01/28 タウンニュース
- ・ 難民の人々を歓迎できる社会に！ 02/01 ハリーナ
- ・ 食から始まる地方再生 アルペなんみんセンター 02/10 地域人
- ・ 施設見学で難民のことを知って 03/27 東京新聞
- ・ 難民問題を考える 03/31 デモクラ TV

一年間の活動を終えて

わたしたちは、難民の居場所づくりや回復を目指し様々な計画と希望を持って本事業を開始しました。

しかし、実際に活動を行なってみて、計画通りに進まないことを痛感しました。入居者はそれぞれ、母国で大変な経験をし、日本に来た後でも孤立や経済的困窮、入管施設での収容などを経て当シェルターにきています。これまで受けた傷は、わたしたちが想像していたより遥かに深く複雑なもので、簡単には「回復」できないことに気づかされました。

また、活動に参加することが入居者にとっては簡単ではないこともわかりました。仮放免中の入居者にとっては、ほんの数ヶ月先のことをイメージすることさえ苦しく困難なことでした。そのためコミュニティとして計画を立ててイベントを実行したり、在留資格取得後の生活を想像して将来に向けて準備をしたりすることは大変なことでした。

このように、計画が思うように実行できない日々の中で、「回復」とは何を指すのか、「自立」とはどのような状態なのかなど、当初目標として掲げていたものを再考せざるを得なくなりました。

一方で、入居者同士が「アルペのみんなは家族」と言って笑い合う姿を見たり、地域の人たちとの関わりを通して「人に会うことが楽しみだ」「自分も何か人の役に立てることがあって嬉しい」といった感想を聞いたりすることもありました。少しずつ心を開く入居者と過ごす中で、人との関わりや地域での居場所が大切だということに改めて気づきました。

これらのことは、従来の通い型の支援や住居の提供のみの支援では見えなかったもので、共同生活という形をとったからこそ見えた成果だと考えています。

また、地域と積極的に関わりを持ったことで、地域住民の変化にも気がつくことができました。最初は難民に怖いイメージを持っていたり、自分とは関係ない遠い世界の人だと思っていたりしていた人たちも、入居者と出会うことで、難民をとりまく現状に関心を持つようになってきました。「友達になりたい」、「なんとかしたい」と言った声もたくさん聞かれるようになりました。これらの変化は、鎌倉市議会から国への難民政策の見直しを求める意見書提出や鎌倉なんみん共生フォーラムに向けた取り組みなどにつながりました。

わたしたちは、この一年間を通して「人との関わり」「居場所」が難民の「回復」につながることを学びました。同時に、地域において難民を迎え入れるきざしを感じることもできました。難民を受け入れることができる社会を目指し、これからも活動を継続していきます。

本事業の実施にあたり、ご支援、ご協力いただきました多くみなさまに心より感謝申し上げます。

発行 2022年(令和4年)3月31日

令和3年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業報告書
難民のエンパワメントと社会参画を通じた回復から自立までの支援事業

NPO 法人アルペなんみんセンター 〒248-0001 神奈川県鎌倉市十二所 80 Tel 0467-55-5422

<https://arrupe-refugee.jp> E-mail: info@arrupe-refugee.jp

